

## 出現位置からみた係助詞「ぞ」

小田 勝

キーワード：係助詞・「ぞ」・出現位置・距離・語順

## 要旨

中古の係助詞ゾが出現する文中での位置は、原則として述語に最も近い「承接可能な成分」であると規定される。述語から離れた位置に出現しているとみられる例も、詳しく調べるとそれ以上述語に接近し得ない構文的制約が存する。またゾが介在することによって基本語順が変更されるという現象も認められた。

以上からゾは述語の直前という位置を絶対的に指向するといえる。成分が有する語順の規定には、従来考えられてきたような「相対位による語順規定」のほかに、このような「絶対位による語順規定」があるとすべきである。

中古の係助詞ゾが述語の直前を指向することから、ゾは承接成分と述語とを強く結びつけて卓立・強示し、他の成分を「背景化」することをその機能とすると考えられる。

## ○ 本稿の目的

本稿は、従来考えられていなかった「距離」「承接不可能成分」な

どの概念を使って、係助詞ゾが文中のどのような位置に出現し、それが何をどのように卓立・強示するのかを考察する。併せて成分が有する語順の規定には従来考えられてきたような「相対位による語順の規定」のほかに「絶対位による語順の規定」が存することを指摘する。

## 一 ゾの出現位置の規定

ゾの出現位置を、述語までの距離を計測することによって規定する。資料には「古今和歌集」「源氏物語」を使用する。和歌は韻文という制約はあるが、一首ずつが文章として独立しており、短文でモデル化が容易であるため、基礎調査としてこれを用いた。

## 一・一 『古今和歌集』の調査と方法論の確立

用例の採集は西下・滝沢氏編『古今集総索引』（昭33）により、巻十（物名）・巻十九（雑体）・巻二十及び墨滅歌は対象外とする。得られた用例は28例であった。この内、文末用法など考察の対象とならない15例を除き、有効用例23例を得た。

距離の計測には文節の概念を用い、文末までの文節数を距離とする。<sup>注2</sup>

〈表2〉 補注

名詞句	主格	66
	対象格	16
	目的格	5
	「に」格	10
	「と」格	27
副詞句	「へ・より・から」などの格	0
	時格(時の補充成分)	5
	副詞	6
	時の修飾成分	4
	活用語連用形	5
接続詞	～助助詞	17
	～係助詞モ・シモ	1
	～つつ	3
	～て	11
述語内	～で	1
	～み	0
	～ば(已然形接続)	1
	～ば(未然形接続)	0
	～(動詞已然形)	0
合計	203	

〈表1〉

距離	用例数
1	164 80.8%
2	27 13.3
3	8 3.9
4	3 1.5
5	1 0.5
合計	203

なものがある。  
 (4) 白波の跡なきかたに行く舟  
 も 風ぞ たよりのしる  
 べなりける (恋一472)  
 しかし、この「たよりの」の部分は、  
 はそもそもゾの承接し得ない成分  
 であり、ために見かけの距離が離

れたのだと想定される。この例においても、ゾは付き得る。最も述語側に出現しているのである。  
 ここで「古今和歌集」において、ゾがどのような成分に承接しているかを調査したのが△表2▽である。△表2▽に見えるような成分を係助詞ゾの「承接可能成分」と呼ぶ。  
 一方△表2▽に見えない次のような成分は、ゾが承接し得ないと考えられるので「承接不可能成分」とする。  
 ①連体修飾成分  
 ②モ・シモを除く係助詞をともなった成分  
 ③逆接の接続助詞をともなった接続句  
 ④終助詞・間投助詞をともなった成分  
 なお△表2▽で示された成分であっても、ゾが承接可能となるのはその成分が主文の述語句を直接修飾している場合にかぎる。次例の「鶯」「もの」(以上目的格「秋より」は承接可能ではない。  
 (5) 花の香を風のたよりにたぐへてぞ  
 鶯さそふしるべには遣る(春上13)

(6) いつはとは時はわかねど秋の夜ぞ  
 もの思ふことの かぎりなりける(秋上189)

(7) つれもなくなりゆく人の言の葉ぞ  
 秋よりさきの もみぢなりける(恋五788)

このことから次もまた「承接不可能成分」と考えられる。  
 ⑤主文の述語句を直接修飾しない成分

以上の考察を経て、△表1▽は修正されなければならない。即ち「承接不可能成分」を除外して距

こうして計測した結果が△表1▽である。和歌という特殊な環境下ではあるが、距離1が圧倒的に多いことが注目される。  
 とところで、この調査において距離2と計測された用例に次のよう  
 (1) 春に知られぬ 花ぞ 咲きける (323)  
 1文節→距離1とする。  
 (2) 龍田川にぞ ぬきは 手向くる (秋下300)  
 2文節→距離2とする。  
 (3) 昨日の淵ぞ 今日 瀬と なる (雑下933)  
 3文節→距離3とする。

一方△表2▽に見えない次のような成分は、ゾが承接し得ないと考えられるので「承接不可能成分」とする。

〈表4〉 補注

	a系	b系	c系	d系	全例	a~d
全例①	432	365	374	552	1723	
和歌	72	23	29	37	161	
文末	78	105	88	138	409	
流れ②	24	33	30	38	125	
+終助詞	26	21	23	44	114	
特殊例	6	5	5	4	20	
有効例①-②	226	178	199	291	894	
距離 1	133	124	117	178	552	61.7%
2	47	24	40	55	166	18.6
3	21	10	21	20	72	8.1
4	13	11	6	11	41	4.6
5	3	4	5	9	21	2.3
6	4	4	4	6	18	2.0
7	1	1	1	2	5	0.6
8	1		2	2	5	0.6
9			1	2	3	0.3
10	1			1	2	0.2
12				2	2	0.2
13				1	1	0.1
14	1				1	0.1
15	1				1	0.1
16			2		2	0.2
29				1	1	0.1
33				1	1	0.1

〈表5〉

	a系	b系	c系	d系	全例	a~d
全有効例	226	178	199	291	894	
距離 1	151	135	128	194	608	68.0%
2	55	35	54	76	220	24.6
3	16	6	16	19	57	6.4
4	4	2	1	2	9	1.0
5						
6以上						

〈表3〉

距離	用例	数
1	177	87.2%
2	23	11.3
3	3	1.5
4	0	
5	0	
合計	203	

一・二 「源氏物語」の調査  
 底本には吉沢義則氏校注「対校

⑤ 特殊例  
 ④ 「ソ」連体形—終助詞<sup>注8</sup>  
 ③ 結びの流れ<sup>注7</sup>  
 ② 文末用法<sup>注6</sup>  
 ① 和歌中のもの<sup>注5</sup>

離を計測しなければならなかったものである。この要請により再調査を行ったのが八表3Vである。この再調査により、例えば用例(1)(2)(4)(7)は距離1に、用例(3)は距離2に計測しなおされることになる。

源氏物語新釈<sup>注4</sup>（昭27）を使用し、「対校源氏物語用語索引」（昭27）によって採集した。得られた用例は1723例であった。この内以下のものを除外し、有効用例894例を得た。

20例 114例 125例 409例 161例

△表4Ⅴはソから文末までの単純な距離を計測したものである。<sup>注10</sup>  
このようにただ機械的に計測しただけでも距離1が圧倒的に多いこ  
とは注目すべきであろう。

△表5Ⅴは「承接不可能成分」を考慮して計測(再計測)したものである。<sup>注11</sup>

再計測の実例を次に示す。

(8) 仏經のいとなみ添へてせさせ給ふめるに、末の君だち、思ふ  
さまにかしづき出だして見むと思召すにぞ、疾く捨て給はむ  
事は難げなる。(総合②204-13) △距離4 ↓再計測1Ⅴ

(9) これに思しつきなば、めざましげなる事はありなむかし、い  
と斯からぬをだに、珍らしき人をかしうし給ふ御心を、と二  
人ばかりぞ、お前にてえ恥ぢあへ給はねば、見ふたりける。

(東屋⑥51-6) △距離4 ↓再計測2。以下、波線部は承接可能成分Ⅴ

(10) 人はえ知らぬに、つとめて此の匣をまかでさせ給へるにぞ、  
親しきかぎりの人々、思ひ合する事ともありける。(葵①376-  
7) △距離6 ↓再計測3Ⅴ

(11) 女御、更衣皆例のごとさぶらひ給へど、春宮の御母女御のみ  
ぞ取り立てて時めき給ふ事もなく、かんの君の御覚えに押し  
消たれ給へりしを、かく引きたがへめてたき御さいはひにて、  
離れいでて、宮に添ひ奉り給へる。(濠標②124-10) △距離14 ↓  
再計測4Ⅴ

△表3Ⅴ△表5Ⅴから、次の現象が確認される。

係助詞ゾは、述語に最も近い「承接可能成分」に出現するとい  
う強い傾向がある。

さて、この現象から、ゾは述語に最も近い位置にあると考えられ  
る成分、例えば目的格や引用格、または述語と密着した連用修飾成  
分に圧倒的に多く承接すると期待される。ところが、ゾの承接成分  
を調査すると(△表2Ⅴ)、この期待は裏切られる。ゾは主格に圧倒  
的に多く承接し、他の格(補充成分)<sup>注12</sup>がそれに次ぎ、連用修飾成分は  
あまり付き易いとは言えない。ゾは述語に最も近い「承接可能成分」  
に自動的に出現するのではなく、あくまでも卓立・強示すべき成分  
に対して付与されるのである。

次例は述語から最も遠い位置(文頭)に出現した例である。

(12) おとどぞなほ常なきものに世をおほして、「今すこしおとなび  
おはしますと見奉りて、なほ世を背きなむ」と深くおもほす  
べかめる。(総合②204-3)

この例は距離15と計測され、再計測においても最大の距離4と計測  
された。このような再計測距離4は全体の1%にすぎないが、それ  
でも皆無というわけではない(類例、椎本⑤71-5、総角⑤144-8、な  
ど)。かかる例外が何故起こるのか、節を改めて考察する。

### 一・三 例外を起こす構文的条件

△表5Ⅴによれば、「承接不可能成分」を除外しても、なお距離が  
2以上ある用例が286例(32%)存する。これらの殆どは次に示す構  
文のものであり、例外には例外となるべき条件が存することが知れ  
る(以下、距離2の220例について示す)<sup>注13</sup>

①距離の計測では2となるが、これ以上ゾを含む成分が述語の側に  
接近し得ない構文的条件が存するもの。

②述語が特定の補語と融合しているもの。15例。

○物の色しざまなどをぞ清らを尽し給へりける。(宿木⑤255-7)  
 「清らを尽す」の上にもう一つヲ格があることに注意)

○……花の散りたる梢どもをも今日ぞ目とどめ給ふ。(柏木④165-15)

⑥述語がくテ接続により、一つの連続した事態を述べているもの。  
 24例。

○女宮の御もとにまうで給はで、大殿へぞ忍びておはしぬる。

(若菜下④70-10)

○例の手馴らし給へる「琴」をぞ、しらべて奉り給ふ。(若菜下

④31-10)

⑦述語が不完全動詞であるもの(サ変複合動詞、補助-被補助の関係を含む)。31例。

○「逢坂ノ」関のあなたよりぞ御返しある。(賢木①393-10)

○中将の君ぞつらくおはする。(行幸③153-3)

⑧ゾがある事態を述べた文に承接して、下の文がその事態に後続するものとして関係づけられているもの。11例。

○「匂宮ガ手紙ヲ」引き隠し給へるにぞ「ソノトタンニ」おと

どさしのぞき給へる。(浮舟⑥139-11)

⑨暫し大殿籠りて起きてぞ御文書き給ふ。(宿木⑤246-12)  
 ⑩ゾが承接可能成分をはさみこむ傾向が圧倒的に多い次のような文型。

⑪「補充成分(又は接続句)+ゾ+副詞句+述語」の型。71例。

○右近ぞ近く仕うまつりける。(浮舟⑥101-6)

○故君の御事をぞ尽きせず思ひ給へる。(宿木⑤283-9)

⑫「くをゾーと思ふ」の型。<sup>注14</sup>26例。

「くをゾ思ふ」の型は散見するが、ヲ格が存在する時、ゾは一  
 般にヲ格に付く。<sup>注15</sup>

○かの御形見の筋をぞあはれとおぼしたる。(幻④386-3)

この二種で距離2の用例の8割を超え、述語から離れた位置に出現していることとみられる例も、このような例外をひきおこす構文的制約が存することを確認した。

## 二 ゾによる語順の変更

以上、ゾの承接した成分は考えられる最も述語の近くに出現するという現象についてみてきた。このことからゾを含む成分は他の成分よりも後位に立つことが予想されるが、本節では実際にゾによる語順の変更が認められるか否かを調査する。中古の散文は文の成分が網羅的に現れることが少なく語順調査に適さないので、モデル化の容易な和歌によって調査する。資料には「古今和歌集」を用いる。<sup>注16</sup>  
 なお以下の考察では音数律の制約は捨象する。

述語近くに出現するというその実例をあげる。

(13) 鶯の鳴く野辺ごとに来て見ればうつろふ花に風ぞ吹きける  
 (春下16)

(14) 冬ごもりおもひかけぬを木の間より花と見るまで雪ぞふりける  
 (冬331)

(15) 秋くれと色もかはらぬ常盤山よそのもみちを風ぞかしける  
 (賀362)

(16) 音羽山けさ越えくれば時鳥梢はるかにいまぞ鳴くなる  
 (夏142)

(17) わがやどの花見がてらに来る人は散りなむのちぞ恋しかりけ

る (春上67)

ここで、諸家の調査・研究の教えるところにより、国語の基本語順を、

時V所V主体Vようす・対象<sup>注17</sup>

のように捉えれば、(13)~(17)の基本語順は次のようであると考えられる。

(13) 風ガ(主体)・うつろふ花に(対象)・吹きけり。

(14) 木の間より・雪ガ(主体)・花とみるまで(ようす)・ふりけり。

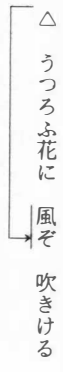
(15) 風ガ(主体)・よそのみちを(目的格)・供エけり。

(16) いま(時)・時鳥ガ(主体)・梢はるかに(ようす)・鳴イテイル。

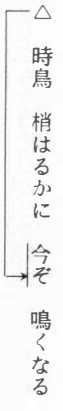
(17) 散りなむのちニハ(時)・花見がてらに来る人ガ(対象格)・恋しくナルハズダ。

基本語順通りの(13)~(17)と実際の姿(13)~(17)の間には、(13)~(16)のような語順の変更が想定される。

(13) 鶯の鳴く野辺ごとに来てみれば



(16) 音羽山けさ越え来れば



のくらい行われているかを調査する。調査は、語順変更の有無の明瞭な、

主格か時格(時語)にゾが承接していて、かつ同一文中に「ようす」「対象」などを表す成分を含むもの

に対して行う。この条件を満たすものは集中17例存するが、語順の変更は右の(13)~(17)の他9例に認められ、計14例であった。<sup>注18</sup>

以上から、ゾは、承接したところの成分そのものにそなわった語順傾向に優越して述語の直前に位置しようとする強い傾向を有することがわかった。

なお、「成分的条件にもとづく語順傾向」<sup>注19</sup>が一般に「a↓b」(aはbの前にくる)の形で、つまり同一の述語にかかる補充成分又は修飾成分が、相互に、傾向として前位か後位かといった相対的な形で規定されるのに対し、当該のゾは述語の直前位という絶対的な位置への指向という形で規定されることが注意される。従って国語の成分が有する語順には、その規定の種類によって次の2類が区別されることになる。

- ①相対位としての語順規定
- ②絶対位としての語順規定

このうち①についてはウケ部の構造(助動詞階層)と密接な関係があることが明らかにされている。<sup>注20</sup>②が全体としてどのような体系をもつのか、今後の課題である。

### 三 ゾは何を卓立・強示するか

以上述べ来たところから、ゾによる卓立強示のさまをモデルで示せば、およそ△▽1Vのようになるだろう。

『古今和歌集』において、このような、ゾに伴う語順の変更がど

ゾが絶対位として述語を指向するのは、ゾが承接成分と述語とを強く結びつけて強示するためだと考えられる。この図において、普通の語順によって並べられている成分A・C・Dは「背景化」されて、「成分B+述語」は「前景化」されていると考える。このように、承接していない成分を「背景化」し、承接成分と述語とを強く結びつけて「前景化」する、これが係助詞ゾの卓立・強示の機能であると考えられる。



ゾの卓立する範囲が従来言われているような直前成分(承接成分)だけでなく、述語にまで及んでいると考えるのは次の5つの理由による。

①直前成分だけに「焦点」をおいた解釈が不自然である。

例えば、

○ 鶯の鳴く野辺ごとに来て見ればうつろふ花に風ぞ吹きける

(113)

について、「風ぞ」だけに焦点をおいた分裂文を作ると訳として不自然となる。

○ 散りがたの花に吹いたのは、なんと風であるよ!

この歌は次のように訳して当たるであろう。

○ 散りがたの花に、なんと風が吹きつけていることよ!

②ゾは多く「ソコトヨノ」と訳される。

これはナムが「ソデネ」と訳して当たることと比較したい。

③ゾと同様に、「絶対位」として述語の直前を指向すると考えられる

「対比」のハも、全て述語を内包した事態と事態とを対比したものである。

「古今和歌集」で確実に対比のハと言える例、即ち「一は一、一は一」という文型について調べると、27例全てが事態と事態とを対比したものであった。

○「み山には松の雪だに消えなく」に「都は野辺のわかなつみけり

○「里はあれて「人はふりにし」やどなれば庭もまがきも

秋の野なる (秋上248)

④述語の内部に生じた例を説明できる。

「しるくぞありける」(春上39)、「明けぞしにける」(秋上117)、「堰きぞかねつる」(恋一41)などの例について、それぞれ上部だけを強調していると考えるのは何とも不自然。

⑤ゾが「絶対位」として述語の直前を指向することを説明できる。

また、こう考えることによって、従来の係助詞論に矛盾・抵触するところはないと考える。

以上により、係助詞ゾの卓立する範囲は、「承接成分+述語」と考えるのが妥当といえよう。

#### 四 他の係助詞の状況

中古の他の係助詞について同様の調査を試みると、△表6Vのような結果が得られた。「源氏物語」による。「承接不可能成分」を考慮し

ない、単純な計測による値)。コソはゾと殆ど同値である。またナムも曲調終止の係助詞としてゾに似た数値を示しているが、ハは全く異なる様相を示していることが確認される。<sup>注24</sup> 平均距離を算出すると次のようである。

ハ 3.84    √ナム 2.15    √コソ 1.98    # ゾ 1.97

ナムは曲調終止を要求する係助詞のなかでは最も遠くから係る傾向があり、ナムは絶対位として述語の直前を指向する性質がやや弱いように思われる。このことはナムがしばしば間投助詞風に訳され、ゾと違い直前成分のみを卓立していると考えられることと関連しよう。

## 五 結 論

本稿で得た結論は次の通りである。

- I 成分が有する語順の規定には、「相対位による語順規定」と「絶対位による語順規定」とがある。
- II 中古の係助詞ゾは、述語の直前を「絶対位」として指向する。
- III 中古の係助詞ゾは、承接成分と述語とを強く結びつけて卓立・強示し、他の成分を「背景化」することをその機能とする。

注1 文末用法11例の他、「こよほ逢坂の」(634、掛詞による結びの吸収)、「こそ泊」(920)、「なにぞは」(382)、「これぞこのつもれば人の老いとなるもの」(879)の4例

〈表6〉 補注

	ぞ	こそ	なむ	は
全 例 ①	1723	1895	1811	390
和歌	161	61	0	5
文末	409	177	589	9
流れ ②	125	103	244	—
+終助詞	114	7	1	—
特殊例	20	9	13	0
コソハ	—	320	—	—
有効例 ①-②	894	1218	964	376
距離 1	552 61.7%	718 58.9%	563 58.4%	126 33.5%
2	166 18.6	215 17.7	158 16.4	88 23.4
3	72 8.1	125 10.3	94 9.8	52 13.8
4	41 4.6	66 5.4	45 4.7	34 9.0
5	21 2.3	35 2.9	39 4.0	13 3.5
6	18 2.0	23 1.9	26 2.7	13 3.5
7	5 0.6	14 1.1	12 1.2	12 3.2
8	5 0.6	4 0.3	9 0.9	4 1.1
9	3 0.3	7 0.6	4 0.4	6 1.6
10	2 0.2	3 0.2	6 0.6	6 1.6
11以上	9 1.0	8 0.7	8 0.8	22 5.9
平均文節数	1.97	1.98	2.15	3.84



を除外した。以下歌番号は国歌大観の旧番号によって示す。

注2 文節認定の基準については注10参照。

注3 本稿でいう「成分」とは渡辺実氏の概念に従う(『国語構文論』昭46、41頁)。

注4 内、玉鬘②367-4は河内本採用本文のものであるので、採らなかつた。又別項目としてあげられている「なぞ」は採らなかつた。なお以下数字は巻数・頁数・行数。

注5 引歌部分を含む。

注6 結びの省略を含む。

注7 係結の不成立・不整合を含む。

注8 「……つらく覚ゆるぞわりなきや。」(紅葉賀①280-14)の如きものやや特殊と考えて除外した。距離の点からみればこの型は殆ど距離1なので、計測に加えれば論旨はさらに有利となる。

注9 特殊例として除外した例は次の2種。  
①すべていひつづけば事事しう、うたてぞなりぬべき人の御さまなりける。(桐壺①21-3)

これは「うたてぞ」は形式的には「なりける」と呼応しているが意味的にはそこに係らず、「なりぬべき」に係る。このような例を特殊例とした。19例。

②后は、おほやけに奏せさせ給ふ事ある時々(即チ)御たうばりの年官年爵、何くれの事に触れつつ、御心かなはぬ時(……)と取り返さまほしう、よろづをおほひむづかりける。(少女②349-5) この例はAとBとが並列の関係になつてゐる。そこでこのうちの一方(前者)を計測外とした。1例。

注10 文節認定の基準は次の通り。

①次のものは複合語(1語)としない。

②サ変複合動詞。

心地/す、対面/す、供養/す(す)、(但し「物す」は1語)

③統轄論の範囲に属すると考えられる連続。

この/世、行く/先、男君/一人、男/女、かひ/なし、言はむ/かた/なし

④反復。  
いづこにも/いづこにも

⑤次のものは1語扱いとする。  
⑥動詞の連続。  
寄り臥す、吹き立つ

⑦個有名・官職名及びそれに準ずるもの。  
三条の北の方、西の京の乳母、かんの君、少将の君

⑧挿入句はこれを無視する。

⑨宮ぞ、いかなるにかあらむ、御心もとめ給はざりける。(竹河④431-1)(距離②2) この1例。

注11 前述の「承接不可能成分」を除外したほか、並列の関係にあるものを全体で1とした。例えば「朔日の日は、例の院に参り給ひてぞ、うち・春宮などにもまゐり給ふ。」(葵①379-3)は、再計測の段階で距離3から2と計測しなおした。

注12 八表2√は「古今和歌集」の調査であるが、「源氏物語」でもほぼ同様の割合といえる。花散里巻までを調査したところ、主格・対象格が54例で、目的格25例、二格23例、ト格16例を圧倒している。連用修飾成分は全種合せて17例であった(なお八表2√と異なり副助詞は想定される格に戻して数えた)。

注13 距離3・4もほぼこれらの組み合わせといえる。

⑩北の方といふさがなものでぞ常に許しなくあんじ聞え給ふ。(若菜下④10-8)

注14 ○人目絶えたる頃ぞ、げに思ひやる方なかりける。(手習⑥298-7)  
「いとなつかしういひ消ち給へる(ヲ)ぞ」……とおほす。(薄標②122-14)の如きヲ格の省略や、「致仕のおとどをぞ」恋しく思ひ聞え給ひける(若菜下④18-8)の如き「をぞ」をぞ入連用形√思ふや、「をぞ」と覚ゆ/見ゆ」などの形も含む。

注15 この例外、即ち「くをーとぞ思ふ」の型は「源氏物語」に4例。

注16 第一・一節で規定した用例採集範囲内による。

注17 宮島達夫氏「カカリの位置」〔計量国語学〕23号、昭37。佐伯哲夫氏「現代文における語順の傾向」〔言語生活〕昭35・12月号。なお中古語の基本語順も現代語とほぼ同様といえるようである(佐伯哲夫氏「語順と文法」昭51)。

注18 15 68 115 140 398 882 921 946 の9例。

語順の変更が認められないのは3例にすぎない。

○この川にもみぢ葉ながるおく山の雪げの水をいままさるらし (冬320)

○大空の月の光しきよければ影見し水をまづこぼりける (冬316)

○しのめのめ別れを惜しみわれぞまづ鳥よりさきに泣きはじめつる (恋三640)

注19 佐伯哲夫氏「現代日本語の語順」昭50、110頁など。

注20 北原保雄氏「助動詞の相互承接についての構文論的考察」〔国語学〕83集、昭45。

注21 「背景化」「前景化」の用語は、益岡隆志氏の受動文の研究(受動文の意味分析)〔命題の文法〕昭62、所収)から借用した。

注22 例えば近藤泰弘氏「構文上より見た係助詞「なむ」——「なむ」と「ぞーや」との比較——」〔国語と国文学〕昭54・12月号)など。

注23 現代語の例であるが、

a 私ハ図書館ニ本ヲ借りニ行ツタ。

b 図書館ニ本ヲ借りニ私ハ行ツタ。

を参照。係助詞ハは述語に近づくと対比性が強まる。換言すれば、bの傍線部のもつ対比性は、述語直前という「絶対位」によって規定され、保証されているとも言える。

注24 中古のハの下接文言が長いことは既に重見二行氏「中古助詞

「ハ」の機能」〔国語国文〕昭62・4月号)に指摘がある。

(表2補注)

○「対象格」とは時枝誠記氏のそれである。

○「に」格には、「に」格の省略も含む。他の格も同じ。

○「時格」とは、本文用例切の如き例、「時の修飾成分」は4例全てが「いま」である(北原保雄氏「日本語助動詞の研究」昭56、245頁以下)。

○「述語内」とは「しるくぞありける」「明けそしにける」「堰きぞかねつる」のような例をさす(中村幸弘氏「補助動詞「あり」小論」〔田辺博士古稀記念国語助動詞論叢〕昭54、所収)。

○表中の0例は、「古今和歌集」にはないが、他の作品(万葉集、八代集)に存することを示す。

○同様の調査として中村幸弘氏「係結の構文論的取り扱い」〔文教大國文〕10号、昭56)がある。

(表4補注)

○a & d系は大野晋氏「源氏物語ハ古典を読む14」(昭59)による。系統により差は認められない。

○距離29、33の例は、長い引用句をはさんだものである(東屋⑥53-10、浮舟⑥152-4)。

(表6補注)

○ハは空蟬巻まで(他は全例)。ハは、係り先が確定できないため、かなり流動的な数値である。なおイカガハ5例を除外し、ラバ15例を加えた。

付記 本稿は国語学会平成元年度春季大会における口頭発表をもとに纏め直したものである。その際御教示下さった佐伯哲夫・北原保雄・

阪倉篤義の各先生に厚く御礼申し上げる。なお、本稿では処理の方法を一部改めたので(例えば、くモを承接可能成分とする、サ変複合動詞を2語として扱う、など)、口頭発表時の資料の数値と異同の生じた部分があることを付記する。

——国学院大学院生——

(平成元年八月二十一日 受理)